

## 「兼好自撰家集」の交響樂的読み

稲田利徳

「兼好自撰家集」の和歌作品としての評判は、はなはだ芳しくない。南北朝期の自筆稿本は現存するものの、他に室町時代の古写本を瞥見した体験もないし、兼好の和歌が室町期の歌論書に正面から問題にされたこともない。また、影響や享受の方面から眺めても、同じ和歌四天王の一人である頼阿の「草庵集」の甚大さと比較してみても、あまりに微弱である。

ところが、江戸時代になると、寛文四年（一六六四）の版本があるほかに、写本が相当数現存する。これから判断すると、近世になると兼好の家集は、かなり多くの識者に繙読された模様である。その享受者のなかには、後水尾院のように、

兼好・頼阿は二条の為世の弟子也。淨弁・慶雲もよく侍れども、好・阿にはおとれること多し。然るに中にも歌の深情は兼好まさり、余情は頼阿すぐれたるやうにおほゆ。

（玉露箋）

と、兼好の和歌を頼阿のそれに比肩する見解の持主もあった。

けれども、「兼好自撰家集」（以下、「家集」と略称）が、近世になって読まれたのは、和歌の魅力によるものというより、江戸時代になって爆発的な人気で迎えられた「徒然草」の著者の「家集」であるとの関心に起因するものであろう。いわば、「家集」は、「徒然草」解説の

ための補注、著者の人間像や生活の一端を窺伺するための資料として繙読されたのではなからうか。江戸時代に、「家集」の和歌を適当にアレンジした「兼好諸国物語」（宝永三年刊）、「種生伝」（正徳二年刊）、「兼好法師伝」（享保十二年刊）などをはじめとする兼好伝が幾種類も刊行されたのも、先の資料としての享受現象を裏付けよう。

近代・現代においても、中世の二条派の和歌は、平凡で陳腐、新鮮味に乏しいという、常識的といってもよい和歌史上の評価の煽りもあって、兼好の和歌は、魅力的な作品として高く評価されていない。その具体的な発言の一部を示してみる。

久松潜一氏は「兼好の歌に見るべきは、その心境の時にあらはれた歌」としつつ、さらに幾首かの和歌を列挙し、

ともあれ兼好の歌は徒然草におけるほど精彩はない。徒然草には自由な兼好の魂が随筆といふ自在な形態の中に躍動してゐると言へる。それに対して歌人としての兼好は二条家といふ歌の家の中に制約されて自由な飛躍をすることが出来なかつた。ここに兼好の二の性格と方向とがあつたと言へる。

と、「精彩」さを欠如した原因にも言及している。

また、「兼好の歌は二条派の極信体的な作品で、おおむね砂を噛むように味気ない」とか、感慨を詠じた和歌を数首引用し、「つれづれ草に比して見れば、あまりにも浅く、甘い感動というほかはない」といった発言も、同じ系脈に連なるであろう。

また、近代文学研究者の吉田熙生氏は、「素朴な印象」として、「兼好法師集」は理の歌であり、じかに訴える感動には乏しいものがある。叙景にすぐれず、心情は稀薄で、詩という言葉の組み合わせに必要な何か欠落している感さえある。言わば規則に外れぬ和音を用いて、定法通りのカデンツを組み上げてはいるが、さっぱり面白くない、というようなものである。<sup>註</sup>とし、兼好の和歌には「歌に必須な或るリズム」が感ぜられないと評する。

他にも類似の発言はあるが、このあたりでとどめたい。こういった不評の背景には、文学史上、鋭い光芒を放つ「徒然草」の著者に対する期待感の落差の感覚が作用しているよう。が、たとえ「徒然草」と切り離してみても、別にこの評価が反転するものでもなからう。

今、私は、これらの評言に異議を提起し、兼好の和歌の復権を目論んでいるわけではない。和歌史のなかで兼好の「家集」を位置付けて品評すれば、先掲のごとき評言が囁かれても、いたしかたのない面を有することも確かであろう。

けれども、私は、これまで幾度となく「家集」を味読してきた体験を持つが、読み込むたびに、その和歌世界に興味律々たる思いに浸りることができ、退屈さはほとんど感じてこなかった。

「家集」に対して、こういった一種の魅力を感じたのは、いうまでもなく「徒然草」を念頭にし、それと和歌とを、自由な連想や想像を働かせながら、重層的に読み味わってきたためである。

重層的な読みの内実は多様である。「徒然草」と「家集」とは、文芸様式を異にする作品ではあるが、その枠組を取りはらい、両作品における思想、思念、あるいは美的理念などの相互比較、和歌に詠出された体験を「徒然草」のなかに連結させて読む試みなどはその一端である。

こういった読みは、比喩的に言えば、「徒然草」の世界から発する音響と「家集」の世界からの音響とを互に交錯させ、一つの和音とし

て聞き取ろうとする試みである。

こういった読みを、仮りに交響乐的読みと称しておく。中核となる楽器は「徒然草」と「家集」の二つだけなので、厳密には二重奏である。二つの楽器から響く音色を和音として聞く私は、さしずめ指揮者の立場にあるとでもいえようか。

勿論、「徒然草」と「家集」とを同次元で比較、交錯させるのは安易である。二つの作品は文芸様式を異にするだけでなく、「徒然草」の各章段の執筆時期や和歌の詠歌年時不明なものが多いからである。

しかし、その問題にはあまり拘泥せず、かなり自由、かつ放胆に交響させてみたい。ただ、この交響乐的読みによって、「家集」の作品としての価値を高揚しようと企図しているわけではなく、「家集」の世界をより豊潤に味読することを庶幾しているにすぎないことも付言しておく。

作品の評価とは別に、こういった読みの試みがあってもよいのではなからうか。

## 二

まず最初に有為転変、無常のさまを詠嘆した和歌と、その具体的な現象である、人間の死を哀傷した和歌を対象にしてみる。

さだめがたくおもひみだる、ことのおほきを

あらしも昨日にけふはかはるかなおもひさだめぬ世にすまへば (四九)

ともすればにはのうきすのうきながらみがくれはてぬよをなげく哉<sup>特</sup> (五〇)

この二首は、同じ心境の時に詠出されたことみなしてよく、二首を重ねることで「さだめがたくおもひみだる、こと」の内実をある程度臆測できる。後の歌は世の憂さに懊悩しながらも遁世できない、我が身の優柔不断な態度を悲嘆しているので、前の歌の「あらしも昨日にけふはかはる」とは、昨日世を捨てる決意を固めても、今日になると躊躇

踏してしまふ不定さの嘆声とみなせよう。これらの歌は深刻な事件に幾度も遭遇し、遁世を希求しながらも、どうしても踏み切れぬ心的動揺の告白であろう。

この二首、特に前の歌を味読すると、「徒然草」<sup>註</sup>第百八十九段が想起される。

今日はその事をなさんと思へど、あらぬ急ぎ先出で来てまぎれ暮し、待つ人はさほりありて、頼めぬ人は来り、頼みたる方の事は違ひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。(中略)かねてのあらまし、皆違ひゆくかと思ふに、おのづから違はぬ事もあれば、いよく物は定めがたし。不定と心得ぬるのみ、誠に違はず。

和歌の「あらしも昨日にけふはかはる」と「おもひさだめぬ世」という措辞は、「徒然草」の傍線部分に近似するだけでなく、内容的にも重なる面がある。和歌で詠出されたような辛い体験を重ねながら、「不定」こそまことといった「徒然草」の虚無的な思想に到達する道程の一齣を見る思いがする。「徒然草」のこの章段の諦観的な不定観からの音響を、先の和歌に重ねて聞くと、その素直にして流暢な調べから発する作者の心の疼きが、一段と哀感を伴って心内に反響してくる。

因みに、この和歌と第百八十九段との関連は、夙に「徒然草文段抄」も指摘、以後の注釈書も言及するものがある。

あづまへまかり侍しに、清閑寺にたちよりて、道我僧都にあひて、  
秋はかへりまでくべきよし申侍しかば、そうづ

かぎりしるいのちなりせばめぐりあはん秋ともせめてちぎりをかまし (七〇)

返し

行すゑのいのちをしらぬわかれこそ秋ともちぎるたのみなりけれ (七一)

関東へ旅立つ時(文保二年頃かとする説もある)、兼好は道我のもとを訪れ、「秋はかへりまでくべき」「権僧正道我集」では「秋はかな

らずのばるべきよし」とある)と別離の挨拶を交わした。それに対して道我は、人間の死期はいつ襲来するかわからない無常の世にあって、秋に帰ると約束するなど解せぬ言葉だと鋭く詰問してきた。兼好は虚を突かれて一本取られた体。とりあえず、行く末いつまでも生きられるともわからぬから、せめて秋までの命を頼むのだと弁解する。

これは別段、目くじら立てての問答ではない。常に無常を凝視している僧侶達らしい問答であり、そこには、仄かな親愛の情さへ漂っている。

この贈答歌から連想されるのは、第四十一段の、賀茂の競馬見物の一日の逸話。棟の木の股で居眠りする法師を「世のしれ物かな。かく危き枝の上にて、安き心ありて睡らんよ」と嘲笑する群衆に向い、兼好は「我等が生死の到来、たゞ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮す、愚かなる事はなほまさりたるものを」と警戒して人々を感動させた話である。

先の贈答歌の場面での兼好の立場は、「徒然草」とは逆転している。さしづめ、道我に言わすれば、「我等が生死の到来、たゞ今にもやあらん。それを忘れて、秋には必ず帰洛すると契るなんて」とからかったといったところか。「家集」の、贈答歌を交わした時と、第四十一段との兼好の表情の異相を思い描いて読むのも一興である。

「命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし」(第七段)と相対的な把握をしてはいるが、人間の死期の不定性、突発性は、兼好自身、「徒然草」で、

身を養ひて何事をか待つ。期する処、たゞ老と死とにあり。その来る事速かにして、念々の間に止まらず。(第七十四段)

若きにもよらず強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで逃れ来にけるは、ありがたき不思議なり。暫しも世をのどかに思ひひんや。(第百三十七段)命は人を待つものかは。無常の来る事は、水火の攻むるよりも速に、のがれがたきものを。(第五十九段)

四季はなほ定まれるついであり、死期はついでをまたず。死は前よりしも来らず、かねて後に迫れり。  
(第百五十五段)

のごとく、繰り返し強調した思念である。人間の生の儂さや死の突然性を警告する、こういつた諸段から発せられる音響は、「家集」の所々にみえる哀傷歌の奏でる哀韻と共鳴し、寂寥さの漂う和音を生む。次の為定との贈答歌は、「家集」にない勅撰集入集歌だが、伝記的にも看過できないものなので取りあげる。

兼好法師が母身まかりける一めぐりの法事の日、ささげ物にそへて申し  
つかはし侍りし  
前大納言為定

別れにし秋は程なくめぐりきて時しもあれとさぞしたふらん (二二六二)

返し  
兼好法師

めぐりあふ秋こそいとどかなしけれあるをみしよは遠ざかりつつ (二二六二)

(新千載集・哀傷歌)

兼好の母は、某年の秋に儂くなつた。凋落の季節の秋に死去したことが、一層、悲哀感を増幅させる。その一周忌に際し、昨秋の母の死を思い起こし、在りし日の面影がしだいに遠ざかると、しめやかな調べで悲嘆する。

母の死といえは、「家集」には頼阿の母のこともみえる。

頼阿母のおもひにてこもりたる春、雪ふる日つかはす

はかなくてあるにつけてもあは雪のきえにしあとをさぞしのぶらむ (二二)

返し

なげきわびともにきえなでいたづらにふるもはかなき春のあはゆき (二二)

頼阿の「草庵集」にある、

雪ふる日、母のはかにまかりて

おもひやる苔の下だにかなしきにふかくも雪の猶うづむかな (二二三八)

しら雪のふりぬる我身いつまでかのこりて人の跡をとほまし (二二三九)

の歌も、同じ頃の詠歌であらうか。

春なのに淡雪が降っている。その雪の儂く消えてゆくのを凝視しな

がら、母の喪に服している頼阿の深い悲しみの心を思いやって歌を贈った。為定も兼好に「さぞしたふらん」とよこして来たが、立場は変って兼好が、「さぞしのぶらむ」と頼阿の心の内を付度する。頼阿の返歌は、母とともに消えることもなく生き残り、空しい日々を送る我が身を嘆く。

春の淡雪を仲介に、遁世者同志の孤寂な心情の触れ合いが、哀韻を奏でている。

これらの、親しい人を喪失した後の空しさを詠じた歌に触れると、「徒然草」の第三十段が反響してくる。

人の亡きあとばかり悲しきはなし。(中略) からは、けうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつ、見れば、ほどなく卒都婆も苔むし、木葉ふり埋みて、夕の嵐、夜の月のみぞ、こととふよすがなりける。思い出でてしのぶ人あらんほどこそあらめ、そもまたほどなくうせて、聞きつたふるばかりの末々は、哀とやは思ふ。さるは、跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、はては、嵐にむせびし松も千年をまたで新にくだかれ、古き墳はすかれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞ悲しき。(第三十段)

この章段の、人の亡き後の悲哀感、先の母の哀傷歌に漂う愁嘆とは、やや異質な感情である。この世に生を営み、やがて死去、墓も無くなり忘れ去られて無にきしてゆく、生あるものの宿命の悲しみである。全体に感傷的な気分が濃厚だが、対象を凝視する眼は冷静である。先の哀傷歌とこの章段が交響楽を奏でるのは、母の死の形見すらなくなる、遙かな時空間の彼方に思いを馳せる時である。

「家集」には主君であつた堀川具守の死を哀悼する贈答歌もある。

ほりかはのおほいまうちぎみを、いはくらの山庄におさめたまつりに

し又の春、そのわたりのわらびをととりて、あめふる日、申つかはし侍し

さわらびのもゆる山辺をきて見ればきえしけぶりの跡ぞかなしき (六七)

返し

延政門院一条

見るまゝ、になみだのあめぞふりまさるきえしけぶりのあとのさわらび (六八)

堀川具守は正和五年(一一三六)正月十九日に逝去しているので、この贈答歌は翌文保元年(一一三七)の春の詠歌。雨の降る日、早蕨を仲介に、「源氏物語」(早蕨)の中君の詠じた、

この春はたれにか見せむ亡き人のかたみにつめる峯のさわらびを背景に、主君の姿、形ばかりか、その亡骸を茶毘に付した煙さえ消えてしまった後の寂しさを、延政門院一条に訴嘆する。早蕨は萌えて、煙は消えた現象を対照させる。茶毘の煙といえは、

あだし野の露きゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらでのみ住みはつる習ひならば、  
いかに、ものあはれもなからん。世はさだめなきこそ、いみじけれ。(第七段)

という、無常を達観した一文を想起する。  
このように無常の価値を認識していても、それは観念世界のもの、兼好も現実を生を営む人間として、親密な人の死に悲しみの感情を横溢させることに変りはない。

次のような、某人に対する哀傷歌もある。

なき人をとぶらひて

をくれぬであと、ふのりのつとめこそいまは、かなきなごりなりけれ(二二八)  
よもすがら雨も涙もふるものをなごかへりこぬ別なるらん (二二九)

追善供養をせめても死者の名残りとしげざるをえない空虚さは、先掲の第三十段の「人の亡きあとばかり悲しきはなし。中陰のほど山里などうつつろひて、便あしく狭き所にあまたあひあて、後のわざども営みあへる、心あわたし。日かずのはやく過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。」を再び連想させる。

後の歌は、亡き母を追慕した定家の絶唱、  
玉ゆらの露もどとまらずなき人こふるやどのあきかせ

(新古今集・哀傷・七八八)

などが脳裡をかすめるが、二度と帰ることのない永遠の別離の不条理に慟哭している。

さらに、

よの中ありしにもあらずうつりかはりて、なれ見し人もなくなり行こと  
を

かたるべきともさへまれになるま、いにとむかししののばる、哉(二三五)  
の歌のような、世の転変とともに親しい友を喪失したなかで懐古の思  
いが増してゆく心情に出合うと、「ひとり灯のもとに文をひろげて、  
見ぬ世の人を友とする」(第十三段)兼好の姿が彷彿としてくる。

「家集」の末尾は、次の三首の哀傷歌で閉じられている。

春のころ、哀傷

わび人のなみだになる、月かげはかすむを春のならひとも見ず (二八四)  
見し人もなきふるさとにちりまがふ花にもさぞな袖はぬるらん (二八五)

かへりこぬわかれをさてもなげくかな西にとかつはいのるものから(二八六)  
決して秀逸な歌とはいえないが、死に対する愁嘆が複雑な心情を絡めて、しめやかに吐露されている。

「家集」には、他にも哀傷歌がある。「家集」の扉の編纂方針に、  
わざわざ「哀傷哥事、自巻頭第十五番書之、忠岑集如此」とメモして  
いる兼好である。「家集」のそこそこには、ある種の思惑を込めて、  
ある間隔を置いて哀傷歌が鏤められ、哀愁の微音を奏でている。

このような哀傷歌に触れる度に、先掲の第三十段をはじめ、  
人静まりて後、長き夜のすさびに、なにとなき具足とりした、め、残しおかし  
と思ふ反古など破りすつる中に、亡き人の手ならひ、絵かきすさびたる見出で  
たるこそ、たゞその折の心地すれ。(第二十九段)

と、亡き人の遺品を見出して、追懐に浸る兼好のシルエット、あるいは、  
「雪のおもしろう降りたりし朝」に、手紙に雪に触れなかつた兼  
好を無風流だとせめた「今は亡き人」(第三十一段)、「九月廿日の比、  
ある人にさそはれたてまつりて、明るるまで月見ありく事」のあつた  
折、妻戸を少し開け、「月見るけしき」で男を送り出し、「ほどなく失  
せ」し人(第三十二段)の面影などが、和歌の背後に走馬燈のように

巡り、哀感の調べを一層深切にしてゆく。

三.

次には、出家前後や遁世生活の心情を述べた和歌を取りあげ、交響乐的に読んでみる。

世をそむかんとおもひたちしころ、秋のゆふぐれに

そむきてはいかなるかたにながめまし秋のゆふべもうき世にぞうき (三四)

とにかくにおもふことのみあれば

つきもせぬなみだの玉のなかりせばよのうきかずになにをとらまし (三五)

ほいにもあらで、とし月へぬることを

うきながらあればすぎゆく世中をへがたきものとなにおもひけむ (三六)

ならひぞとおもひなしてやなぐさまむわが身ひとつにうき世ならねば (三七)

この一連の歌は、「とにかくにおもふことのみ」に煩悶し、出家を思い立った頃の心境とみてよからう。勿論、虚構を本質とする和歌ゆえ、言葉に表現されている内容を、そのまま作者の本心だと断定することには慎重でなければならぬ。けれども、詞書を伴ったこの実情歌には、厭世感を強めながらも、決然と出家出来ずに逡巡する作者の姿をとらえてよからう。

遁世したとて、秋の夕べの辛さは、なんら変化がないのではと、出家後の心境を見通してしまふ見え過ぎる眼(三五)、苦悶が鬱積しようとも、そのまま居れば、なんとか過ぎてゆくこの世だ(三六)、世を渡る苦しみは自分だけではない、世のなべての人の習いだ(三七)——ここには諦念とも居直りともとれる情念が揺曳している。

不幸な出来事や痛切な体験を経ながらも、一気呵成に出家に踏み切れないという和歌から奏せられる音色は、「徒然草」の次の章段の人間像と重なって交響する。

不幸に愁に沈める人の、頭おろしなど、ふつ、かに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく明し暮したる、さるかたにあら

まほし。

(第五段)

一時の興奮にまかせて、軽々しく頭を剃ることをせず、静かに家に籠居する人に、「さるかたにあらまほし」と好感を寄せる。なにやら、そこに、かつての兼好自身の自画像をダブルさせているようで意味深長である。

しかし、出家、遁世を躊躇する優柔不断な態度は、「徒然草」の思想と、ある意味で抵触する。これは看過できない問題を投げかけてくる。

今少し、出家前後の心情を述べた歌を追跡してみよう。

世中おもひあくるころ、山ざとにいねかるを見て

よの中の秋田かるまでなりぬれば露もわが身もをきどころなし (四六)

なにごともしばしばかりの世中をいく程いとふわが身なるらん

うきこともしばしばかりの世中をいく程いとふわが身なるらん (四七)

いづかたにも又ゆきかくれなばやとおもひながらも、いまは身をこころにまかせたれば、中／＼をこたりてのみぞすぎゆく (四八)

そむく身はさすがにやすきあらまじに猶山ふかきやどもいそがず (四九) 最初の歌は出家直前、後の二首は出家後の心境を詠じたものか。ほんの短い人生にあって、世を厭つてみても、どれほどの意義があるうかと反芻したり、出家しても一向に山深く遁世しようとしなない態度には、強烈な出離の意欲・実践の軌跡は認められない。実に、この「中／＼をこたりてのみぞすぎゆく」不徹底な態度こそ、兼好が「徒然草」において、最も嫌悪し、あつてはならない態度として教戒し続けたものではなかったか。

それは「徒然草」を一貫する思想であり、読者をして、兼好を強い求道者として造型する因になっているものである。ここでその種の信念を述べた諸段から断片的に幾段かを列挙してみる。

大事を思ひ立たん人は、去りがたく、心にかゝらん事の本意を逃げずして、さながら捨つべきなり。「しはしこの事はてて」、「同じくはかの事沙汰しおきて」、

「しかくの事、人の嘲やあらん、行末難なくした、めまうけて」、「年来もあればこそあれ、その事待たん、ほどあらじ。物騒がしからぬやうに」など思はんには、えさらぬ事のみいと重なりて、事の尽くる限もなく、思ひ立つ日もあるべからず。おほやう、人を見るに、少し心あるきは、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。

(第五十九段)

老来りて、始めて道を行ぜんと待つことなけれ。古き墳、多くはこれ少年の人なり。はからざるに病を受けて、忽にこの世を去らんとする時にこそ、はじめ過ぎぬるかたの誤れる事は知るなれ。誤りといふは、他の事にあらず、速にすべき事を緩くし、緩くすべきことを急ぎて、過ぎにしことの悔しきなり。その時悔ゆとも、かひあらんや。

(第四十九段)

一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、いづれかまさるとよく思ひくられて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひすてて、一事をはげむべし。(中略)何方をも捨てじと心にとり持ちては、一事も残るべからず。(第百八十八段)死におもむかざる程は、常住平生の念に習ひて、生の中におほくの事を成じて後、閑に道を修せんとおもふほどに、病をうけて死門にのぞむ時、所願一事も成ぜず。(中略)所願を成じて後、暇ありて道にむかはんとせば、所願尽くべからず。如幻の生の中に、何事をかなさん。すべて所願皆妄想なり。所願心にきたらば、妄心迷乱すと知りて、一事をもなすべからず。直ちに万事を放下して道にむかふ時、さはりなく所作なくて、心身ながくしづかなり。

(第二百四十一段)

人生で最大の肝要事は、「大事」という「一事」を速かに成就すること——これがこの一連の諸段の共通する主題である。「大事」とは仏教語の「一大事」で、出家修行して開悟することを指す。それには気がかりなことを即時に放下すべきで、あれこれ遅疑しては、そのまま空しく月日を過ごし、結局、「一大事」をなすこともなく終ると論ず。これは読者への警戒であると同時に、「日暮れ、塗遠し。吾が生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。」(第百十二段)のごとく、自己自身に向つての激烈な叫びでもあったのではなからうか。

繰り返し強調される「徒然草」のこの人生観は、先に記した和歌の世界の、出家、遁世に逡巡し、右顧左眄する兼好の姿とは、ずれを感ずる。

出家を勇断できなかつたばかりではない。

とぶらふべきことありてみやこにいで、

たちかへりみやこのともぞとはれけるおもひすて、もすまぬ出ぢは (二二四)

この歌になると、ひとまず山に隠棲しても、永久にそこに住み付く気はないことを披瀝してさえいる。

この態度は、

「道心あらば、住む所にしもよらじ。家にあり、人に交はるとも、後世を願はんには難かるべきかは」と言ふは、さらに後世知らぬ人なり。(中略)心は縁にひかれて移るものなれば、閑ならでは道は行じがたし。

(第五十八段)

という、静閑な場においてこそ誠の修業が可能であるとの主張とずれているのではなからうか。

こういつた「家集」と「徒然草」との「言行の隔り」に着目された、細谷直樹氏は、人間兼好に対し「あまりの二枚舌に啞然とせざるを得まい」とか、和歌表現には「全く苦惱の影がなく、怠る自分を突き離して見る冷徹な目も感ぜられない。「ぬけぬけ」としかいいようのない無神経さにただただ呆れるばかりである」と誠に手厳しい。そして「徒然草に披瀝された激越な道念は、前言した僧本来のあり方において身を処し得ぬわが身のさがのつたなさを思つての自嘲的な劣等感と焦燥感の裏返しに寂しさを伴って火と燃えあがつたものであることに気付こう」といった見解を提示し、「徹し得ぬのが人間なのだ、徹し切れぬからして「この世」なのであり、徹し切れぬことが「生きる」ということなのだ、とするこの人間観」こそ「徒然草」編集時のそれであると説き及んでいる。

けれども、人間の心情にかかわることを、「家集」と「徒然草」とを同次元に置いて論じるのは短絡的にすぎるのではなからうか。肝心

なことは、「一枚舌」といった人格の問題に直結させるのではなく、なぜ、こういった、一種の自家撞着が生じているかを見据えることだろう。

それには、自己の体験的な心情を吐露する様式を有する和歌と、(歌題詠などは必ずしもそうではないが)、自由な立場で思念を披瀝しうる随筆というジャンルの相違も考慮に入れると同時に「徒然草」が、誰に向って執筆されたものなのか、その想定した読者のことも念頭におかねばなるまい。

「徒然草」は兼好にとって、この転変きわまりない無常の現世にあって、人間のあるべき生き方を説いた、理念の書であると思う。万事を放下して、ただちに仏道修行におもむき、閑居の気味を獲得すべきだとする求道の叫びは、なにも自己自身がそのままに実践行動した体験として説いているわけではない。静閑な心身を得るためには、かくあるべき理想とする人生観を披瀝したのであって、それは読者に対する説論であると同時に、自己自身の希求するところでもあったのではなからうか。

また、兼好自身、「徒然草」に、厳しい求道精神の志向を記述しながら、自己の体験を回顧したとき、そこに二重人格とか、「一枚舌」といったことを、それほど意識しなかったのではなからうか。なぜなら、遁世に踏み切るまでには種々な迷いや逡巡はあったにしても、とにかくにも、彼は多くの未練を放下し、おそらく二十代後半から三十代にかけてのある時期に出家、遁世を遂げていたからである。これは紛れもない事実であり、「徒然草」の思想の背後を支えていたであろうし、案外、そこに自負の念を抱いていたかもしれない。こういった点を考慮してみると、「家集」における遁世前後の心情は、「徒然草」の理念と全く相容れないとは感ぜられないのである。

むしろ、「徒然草」の、即時に諸縁を放下して遁世すべしとの強烈な音響と、「家集」における、逡巡の果てにやっと出家に踏み切った

嘆息の低音とが交響し、そこに無常の現世に生を営む人間の複雑な心的動揺が鮮明に炙り出されてくることこそ興味深いといわねばならぬ。

なお「家集」には、出家をめぐり、いたずらに右顧左眄する歌ばかりでなく、

世をのがれてきそちといふ所をすぎしに

おもひたつきそのあさぬのあさくのみそめてやむべき袖のいろかは (五一)

(修学院といふところにこもり侍しころ)

のがれこし身にぞしらる、うき世にも心にもの、かなふためしは (五三)

身をかくすうきよのほかはなけれどものがれしものは心なりけり (五四)

いかにしてなぐさむ物ぞよの中をそむかですぐす人にとはや (五五)

といった、一度出家を決行したからには、生半可な求道精神であってなるものかと自己を鼓舞した歌とか、隠棲し修行することによって、物事が心に適うこと、身はともかく心は世の喧騒を離脱できたこと、出家しない俗世人に「いかにしてなぐさむ物ぞ」と詰問するといった、遁世の意義を認識した心境歌のあることも付言しておく。

このあたりで、遁世前後の生活態度や心境を詠じた歌で、「徒然草」と交響するものに触れておきたい。

三月ばかり、つれづれとこもりぬる比、雨のふるを

ながむればはるさめふりてかすむなりけふはたいかにくれがてにせむ (四二)

かくしつ、いつをかぎりのしらまゆみおきふしすぐす月日なるらん (四三)

ここには、春雨の降り続くなかで、「つれづれ」の無聊をかこつ、倦怠の情が底流している。

「つれづれ」の生活といえは、「つれづれ」なるま、に日暮らし、硯

にむかひて」の著名な序段が思い浮かぶが、同時に、

つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。まぎるゝかたなく、たゞひとりある

のみこそよけれ。(中略) いまだ誠の道を知らずとも、縁を離れて身を閑にし、



事にあづからずして心をやすくせんこそ、暫く楽しむとも言ひつべけれ。

(第七十五段)

と、独居の閑寂さを梔子に「つれづれ」の意義を強調した章段も反響してくる。確かに「まぎる、かたなく、ただひとりある」生活に安心立命の境地を獲得したと感ずる時もあったろうが、孤独の深淵を覗き見て、痛切な寂寥感に襲われる瞬間もあったろう。

しはすのつごもり、あはれなることどもおもひつゞけて、うちもまどろまぬに、かねのをといと心ほそし

春ちかきかねのひゞきのさゆるかなこよひばかりとしもやおくらん (二二六)

おどろかすかねのをとさへき、なれてながきねぶりのさむるよもなし (二二七)  
十二月晦日の夜、種々な悲哀を思い続けて一睡もできない兼好の耳に、無常を告げる鐘の音が響いてくる。詞書の心細い心境を和歌は十全に形象化し得てはいないが、詞書とともに味読すると、寂しい余韻がしんみりと浸透してくる。

あはれなる夢を見てうちをどろきたるに、かたるべき人もなければ、

さめぬれどかたるともなきあか月のゆめのなみだに袖はぬれつ、 (二三〇)

見ずもあらでゆめの枕にわかれつるたまのゆくゑはなみだなりけり (二三一)  
これまた、ぞっとするような孤独地獄を覗き見て、不安におののく作者の胸の鼓動が伝わってくる歌である。

友の存在といえば、題詠歌ではあるが、

閑中五月雨

(九四)

はれやらぬ心のともながめてもひとりぞくらす五月雨のそら  
と「心のとも」という措辞がみえる。それと同時に、「徒然草」で「友」を論じた章段が連想されてくる。

同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まんこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、露連はざらんと向ひるたらんは、ひとりあるこ、ちやせん。(中略) げには、少しかこつかたも、我と等しからざらん人は、大方のよしなしごと言はんほどこそあら

め、まめやかな心の友には、はるかにへだ、る所のありぬべきぞ、わびしきや。

(第十二段)

ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわぎなる。

(第十三段)

人生の憂悶や寂寥さを真実に語り合える「心の友」の不在からくる孤独感が、昔の書物の中に、「見ぬ世の人を友」とする行為に向かわせる。

一方、人との交誼にかかわる次のような歌もある。

やまざとのすまぬもやうくとしへぬることを

さびしさもならひにけりな山ざとにとひくる人のいとほる、まで (二三三)

人にしられじとおもふころ、ふるさとの人のよかはまで

たづねきて、よの中のことどもいふ、いとうるさし

としふればとひこぬ人もなかりけりよのかくれがとおもふやまぢを (二三二)

されどかへりぬるあと、いとさうぐし

山ざとははれぬよりもとふ人のかへりてのちぞさびしかりける (二三二)

山里に隠遁し、横川に籠居した兼好にとつて、人の訪問が厭わしい心境にもなっているが、その一方で、その人が帰った後、ふと寂しさがこみあげてくる。後半の二首は、そういった微妙な心の変化を素直に吐露していて興味深い。

人の訪れを嫌悪する歌に触れると、「徒然草」の、

さしたることなくて人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行きたりとも、その事はてなば、とく帰るべし。久しく居たる、いとむつかし。人と向ひたれば、詞おほく、身も草臥れ、心も閑ならず。万の事さはりて時をうつす。

互ひのため益なし。 (第百七十段)

といった、人の訪問によつて、身心の平穩さが乱されるとした章段が反響してくる。

逆に、

ほうりむにこもりたるころ、人のとひきてかへりなむとするに

もろともにきくだにさびし思ひをけかへらむあとのみねの松かぜ (一七)

いかなるおりにかこひしき時もあり

あらしふくみ山のいほのゆふぐれをふるさと人はきてもとはなん (一三三)

と、法輪寺に籠居して峯の松風を独りで聞く寂しさや、嵐吹く山の夕暮時に、人の訪れを渴望する歌に触れると、先の第七十段の後半の「そのこととなきに人の来りて、のどかに物がたりして帰りぬる、いとよし」をふと思ひ起こしたりする。

「徒然草」で閑居生活の大事を説きながら、一方「家集」で、「独居の寂しさ、人恋しさを素直に吐露する人間兼好」に対して荒木尚氏は、「閑居を庶幾する自意識が強いのか、それとも天性さびしがりやで人一倍人間を愛した人だったのか、恐らくそのどちらも真実であったろうが、兼好の内なる鏡にも似たこれらの和歌は、隠遁者というには余りにも人間的なその心情をありのままに写し出す。」と評されている。

また、「家集」には、

山手に念仏してゐたるに、みやこよりたづねくる人の中に、わかきおと

この、いとねんごろに物がたりして、「かゝるすまゐはいとたづきなしや、

なに事かしのびがたき」など、ふは、おもふ心ありてやとみゆるもあは

れにて

山ざとにとひくるとも、わきて猶心をとむる人は見えけり (一三三)

と、山寺に籠居して念仏修行する一齣もあるが、この歌から奏でられる音色は、「山手にかきこもりて、仏に仕うまつるこそ、つれづれもなく、心の濁りも清まる心地すれ」(第十七段)の世界と交響する。

以上、出家前後や遁世生活の心境を詠出した和歌と、それに伴って交響してくる「徒然草」の章段を列挙し、いささか私見を述べてきた。そこには、「徒然草」の思想や理念と、「家集」の世界の心境とが、乖離しているものや一致するものなど、かなり多様な面をみせていた。その複雑な様相を一種の交響樂とみて耳を傾ければ、一人の人間とし

ての兼好の心の動悸が伝播してくる。

#### 四

通説では「家集」の方が、「徒然草」より後に編纂されたことになっている。

けれども、「家集」は相当長い期間にわたる歌を収録しており、「徒然草」執筆以前のことか詠歌対象になっているものも少なくない。従って、和歌でよまれた体験が、そのまま「徒然草」の方にも記述されてよいわけだが、明確に同一体験だと断定できるものはほとんどない。これは兼好が意識的に腑分けしたのかも知れないが、それ以上に、歌集と「徒然草」との相違する叙述形態からくる収録対象の異相に起因するためではなからうか。

それでも両作品を仔細に比較すると、「家集」の詠歌内容が、「徒然草」のある章段となんらかの関連を有するのではないかと臆測されるものが幾段か存する。

ここではこの方面―実体験の背景において、相互に交響し合うものを対象としてみる。

「家集」に冬の夜を回顧した、印象鮮明な歌がある。

冬の夜あれたる所のこにしりかけて、木だかき松のこのまよ

りくまなくもりたる月を見て、あか月まで物がたりし侍ける人に

おもひいずやのきのしのぶに霜さえて松の葉わけの月を見し夜は (一三三)

霜冴える冬の夜、松の木の間から洩れる月光を眺めながら、暁方まで女性(と思う)と語り明かしたというこの場面は、「徒然草」の次の王朝的章段を呼び起こす。

北の屋陰に消え残りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる車の轆も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬに、人離れなる御堂の廊に、なみくにはあらずと見ゆる男、女となげしに尻かけて、物語するさまこそ、何事にかあらん、尽きすまじけれ。

かぶし・かたちなど、いとよしと見えて、えもいはぬ匂ひの、さと薫りたるこそ、をかしけれ。けはひなど、はづれく聞えたるも、ゆかし。(第百五段)

この章段が、先の和歌の場面と関連を有することは、夙に「徒然草拾遺抄」が指摘して以来、多くの研究者も承認してきた。私も双方の関連を認めた上で、さらに相違する面に着目、その意味するところを通し、「徒然草」の虚構性の一端を論じたことがあるので、詳細はそれに譲りたい。

恐らく、第百五段は、「家集」のごとき実体験をデフォルメして仕立て上げたものと認めてよいが、和歌を交響乐的に読むとどうなるか。第百五段の情景を和歌の背後に透視することによって、「おもひいづや」と初句に込めた和歌の世界の感動の内実が、より鮮明に具体化され、独特の味を醸し出してくるといえる。そこに交響乐的に読む意味と魅力がある。

王朝的章段との関連という点では、

秋の夜、とりのなくまで人とものがたりしてかへりて

ありあけの月ぞ夜ふかきわかれつるゆふつけどりやそらねなりけむ(二二五)

の歌も留意される。秋の夜長を鶏の鳴くまで人(女性であろう)と語り合つて帰つた体験を、孟嘗君の函谷関の故事を背景に詠じた歌。この歌の場面が、第百四段の、荒れた宿の女との語らいを叙述した後半、さて、このほどの事ども細やかに聞え給ふに、夜深き鳥も鳴きぬ。来しかた行末かけてまめやかなる御物語に、このたびは鳥も花やかなる声にうちしきれば、明けはなる、にやと聞き給へど、夜深く急ぐべき所の様にもあらねば、少したゆみ給へるに、……

といった情景と重なる面がある。第百四段は、「家集」のごとき体験をもとに虚構されたのではないかとの見方もある。あるいはこの臆測は当たっているかもしれないが、「家集」の詞書の説明が詳細でないため、なんともいえない性質のものである。ただし、両作品の場面が同一体験でなかったとしても、鶏の鳴くまで女と語り明かした兼好の体験が、

第百四段の執筆に際し、なんらかの影響を及ぼしている可能性はある。その意味で「家集」の歌は、第百四段の具象的で鮮明な場面から発する音響を受けて、交響し合うであろう。

さらに別の方向から、兼好の恋愛体験を思い遣つてみたい。

「家集」で、

たのもしげなることいひてたちわかる、人に

はかなしやいのちも人のことの葉もたのまれぬ世をたのむわかれは(三八)

と詠じた「たちわかる、人」とは女性ではなからうか。「別れてもまた逢えますよ」と言つて去つた人に、命も契りも頼みにならないこの世の別離を慨嘆し、妙に拘泥している。

この歌から思い当るのは次の章段。

風も吹きあへずうつろふ人の心の花に、なれにし年月を思へば、あはれと聞きしことの葉ごとに忘れぬものから、我が世の外になりゆくならひこそ、亡き人のわかれよりもまさりてかなしきものなれ。(中略)堀川院の百首の歌の中に、

むかし見し妹が増根は荒れにけりつばなまじりの莖のみして

さびしきけしき、さる事侍りけん。

(第二十六段)

人間の内部を凝視、心の移ろつて離れゆくさまを、死別よりも悲しいと洩らしている。

兼好にかつて愛しい女性との悲しい別離があったとすれば、「家集」の歌とこの章段の「我が世の外になりゆく」人は緊密に結び合う。昔の恋人の住んでいた荒れた垣根の莖を詠じた公実の歌に対し、「さびしきけしき、さる事侍りけん」と公実の実体験として享受しているのも、そのあたりに起因するのではなからうか。

人にものをいひそめて

かよふべきころならねばことの葉をさぞともわかで人やきくらむ(四七)

つらくなりゆく人に

いまさらにかはるちぎりとおもふまではかなく人をたのみけるかな(四八)

先の歌の詞書は、元来、「いふこと心えぬよしするをむなに」とあつ

たのを見せ消ちにして「人にものをいひそめて」と改めているところからみて、「人」は女性であろう。二首ともに、不如意な恋愛体験の述懐だが、後の歌は、第二十六段と交響する。

心変りの歌といえは、

みねつゝきあらしにうきてゆく雲のうつりやすくぞおもひかけてし (八七)  
など、連続して四首の恋歌もあるが、これらは「寄雲恋」の題詠歌なので、そのまま実体験とは直結できない。

このようにして、兼好の前を離れていった女性体験が、「女の性は皆ひがめり。人我の相深く、貪欲甚だしく、物の理を知らず。(中略)すなほならずして、拙きものは女なり」(第一百七段)と、綿々と綴られた手厳しい女性観と、なんらかの関連があるかどうか、あれこれ夢想してみるのも興味深い。

この項の最後に、実体験としては別のものではあるが、その行為の状況や場が類似しているため、「家集」と「徒然草」の場面が、かすかに触れ合うものを二つだけとりあげる。

大覚寺のたきどといふあたりにすむ人のもとへ、十月ばかりしぐれふる日たづねいきたるに、には、山のふもとにて、すゝきのおほくまねきたるを

かれのこるすそ野、おばな秋よりもまなくしぐれに袖やかすらむ (二七七) 齊藤彰氏は「草庵集」の類似記事との比較から、これは正中二年(一三二六)三月二十日邦良親王薨去によって出家した、有忠の歌会にでかけた折のものとして推定している。その当否はさておき、神無月(十月)の時雨降る日に、滝殿の辺に住む人のもとに尋ね行き、そこに荒涼たる薄の景を見た体験は、

神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入る事侍りしに、遙かなる苔の細道をふみわけて、心細くすみなしたる庵あり。(第十一段) という場面とかすかに触れ合う。また、

八月十五日夜、報恩寺にて人／＼あまた哥よむよしき、侍しを、わづらふことありてえまからで申つかはし侍し (二一九)

月にうき身をあきざりのへだてにもさはらでかよふ心とをしれ

この和歌の詠歌年時には諸説があるが、報恩寺とは、京都市上京区千本にある千本釈迦堂のこと。従って「徒然草」の、

千本の釈迦念仏は、文永の比、如輪上人、これをははじめられけり。(第二百二十八段)

という一条とともに、

二月十五日、月明き夜、うちふけて、千本の寺にまうでて、うしろより入りて、ひとり顔ふかくかくして聴聞し侍りしに、優なる女の、姿・匂ひ・人よりことなるが、わけ入りて膝にみかれば、にほひなどもうつるばかりなれば、便あしと思ひて、すり退きたるに、なほるよりて、同じ様なれば、立ちぬ。(第二百三十八段)

と、妖艶な女性の誘惑にあつた場面を連想する。「家集」の歌は、報恩寺の歌会に、病気で参加できない無念さを訴えているが、これに対して、小倉実教の返歌もある。その歌会のある報恩寺が、「徒然草」の先のような体験のあつた寺かと想像するのも、なんとなく楽しい。この二つは体験としては同一のものではなく、私の気儘な連想によるもの。この調子で交響させてゆくと切りがないので、このあたりでとどめたい。

#### 四

これまで扱ってきた、無常を基底にした哀傷歌、出家遁世前後の述懐歌など、いずれも歌題詠でなく、体験を背景にした実情歌が中心であつた。

歌題詠になると歌題に拘束され、そこに詠出されている内容が、必ずしも詠者の心境や思念そのままではないので、勢い、このような偏重をきたしたわけである。

そこで、ここでは歌題詠をも含め、兼好の美意識にかかわるもので、「家集」と「徒然草」とが交響しそうなものを取りあげてみたい。兼好の美的理念といえは、なんとといっても、著名な次の章段が呼び起される。

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行衛知らぬも、なほ哀に情ふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見所おほけれ。  
(第三百十七段)

この美的理念は、単に花や月に限定したのではなく、「万の事も、始終こそをかしけれ」と、人生万般に通うとする。「徒然草」を繙読してゆくと、この美的理念を通して景物を眺めている章段が散在する。例えば、

春の暮つかた、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の、奥ふかく、木立も  
のふりて、庭に散りしをれたる花、見過しがたきを、  
(第四十三段)

と、「散りしをれたる花」に目をとどめたり、  
北の屋陰に消え残りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる車の轍も、霜  
いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬに、(第百五段)  
と、「隈なくはあらぬ」有明の月に情趣を見出しているのなどがそれである。

この自覚的で特異な美的理念からすると、咲き始めた頃の梢、散り萎れた桜のゆかしさを対象にした歌があつてもよい。

しかし、「家集」には、そういった美的理念を、ことさら強調した歌は見当らない。

あふさかの関ふきこゆる風のうへにゆくあもしらずちるさくらかな (三)  
みなと河ちりにし花のなごりとやくもの浪たつ春のうら風 (一六七)  
このように散る桜に取材した歌はあるが、先の美的理念と対応しているものではない。

逆に、

ひとり花のもとにたづねいりて

見ぬ人にさきぬとつけむ程だにもたちさがりたき花のかけかな

花のちるを

盛花

まつほの花のこゝろのつれなさもさきてはあだになどかはらむ (二五六)

かぎりなきいろもにほひも猶そひぬ花はけふをやわきてまちけむ (二一四)  
のように、満開の花を賞美し、散つてゆく花の心を「あだ」と託つ歌がある。

月に対してはどうか。

心のまゝに茂れる秋の野らは、置きあまる露に埋もれて、蟲の音かごとがまし  
く、遣水の音のどやかかなり。都の空よりは雲の往来も速き心地して、月の晴れ  
曇る事さだめがたし。  
(第四十四段)

春月

この光景の月は、「家集」の、

よもすがらかすめる月の影ながら行かふくもやはれくもるらん (二三八)

の歌が、月の影が晴れ曇るさまに興味を見出している点で響き合う(秋の月との相違はあるが)。

また「徒然草」第十九段には、「すさまじきものにして見る人もなき月の、寒けく澄める廿日あまりの空こそ、心ほそきものなれ」と、冬の月光の澄む空から「心ほそき」情感を誘発されているが、これも「家集」の、

おもひいづやのきのしのぶに霜さえて松の葉わけの月を見し夜は (三三)

野外冬の月

冬がれはのかせになびく草もなくこほるしも夜の月ざびしき (一八〇)  
たまぐらの、べのはつしもさゆる夜のねてのあさけにのこる月かけ (二一八)  
といった、霜置く冬の月光に寂寥美を見出している歌と響き合う。さらに、

むさしのかねさといふところに、むかしすみし家の、いたうあれ  
たるに、とまりて月あかき夜

ふるさとのあざちがにはのつゆのうへにとはくさ葉とやどる月かな (七六)  
月やどるつゆのたまくらゆめさめておくての山田あきかせぞふく (一三七)

かすがの、露にぞうつるあづまぢのみちのはてよりいでし月かけ (一四二)  
木のまよりしたばのこらずやどるなり露もる山の秋のよの月 (二二六)

といった歌は、いずれも露に映じた月光を見詰めながら、そこに荒涼さ、寂寥の感覚を見出し、そこに共通性がある。

露と月といえは、

万のことは、月見るにこそ、慰むものなれ。ある人の、「月ばかり面白きものはあらじ」と言ひしに、またひとり、「露こそあはれなれ」とあらそひしこそ、をかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらん。

(第二十一段)

などの興味深い論争の一齣を連想する。刻々と変化する月光が消えやすき露にやどる光景は、儂い触れ合いであるだけに、心細い哀感をかきたてられる景である。この光景は、「月光」が、「椎柴・白檜などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしてみても、心あらん友もがなど、都恋しう覚ゆれ」(第百三十七段)といった世界とも重なりあう。

長くなるので、ここでは美意識の対象を、花と月とに限定した。このほか、天象・植物・動物にわたると多数にのぼるが割愛する。

「徒然草」の中には、

某とかやいひし世捨人の、「この世のほだし持たらぬ身に、たゞ空の名残のみぞ惜しき」と言ひしこそ、誠にさも覚えぬべけれ。

(第二十段)

のごとく、世捨人を介しての、空に対する無限の憧憬、

月・花はさらなり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩にくだだけて清く流る、水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。

(第二十一段)

など、人の心に物の哀れの情緒を触発してゆく風や、清らかな水の流るに魅力を感じるとする章段があり、各々に鮮烈な印象をとどめる。

「家集」に空や風や水を詠じた歌に触れると、ふと、これらの章段が想起され、余韻を奏することもある。

## 五

「兼好自撰家集」を特色付けているのは、そこに鏤められている述懐歌の存在である。述懐歌の盛行は中世和歌の特質ではあるが、兼好の場合は観念的なものではなく、厭世観を抱き、出家・遁世に踏み切った体験を有するので、静かに吐露されている歌にも、切実な情感が溢れている。

述懐歌は、世の厭わしさ、住み憂さを述べたものから、自己自身の嫌悪感、人間不信の表明など多岐にわたる。

ここでは、出家・遁世前後でとりあげた歌は除き、そういった内容を述べた和歌を提示し、「徒然草」の世界と交響乐的に味読してみたい。「家集」の巻頭に、

はるのころよりこむといふ人の、秋になるまでとはぬに

春もくれ夏もすぎぬるいつはりのうきは身にしむ秋のはつかぜ

(一)

という、約束を果さぬ人の偽りを託つ歌が配置されているのは意味深長である。同様な発想歌に、

ひさしくをとづれぬ人のがりのひやりし

花ぞめの色ともきかぬ日かずさへとはねばやすくつるころかな

(二五八)

と待てどやって来ない人の移ろいやすい心を恨むものもある。これらの歌に接すると、「徒然草」の「待つ人はさはりありて、頼めぬ人は来り。頼みたる方の事は違ひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ」(第百八十九段)、「風も吹きあへずうつるふ人の心の花に、なれにし年月を思へば」(第二十六段)、「人の志をも頼むべからず。必ず変ず。約をも頼むべからず。信ある事すくなし」(第二百一十一段)など、一連の、人間の心の変意や不信を述べた多数の諸段が各々に小さな音響を發して収斂し、先の歌の音色と和合、歌の余意であったものが響き出してくる感がある。

いかだを

お井川つなぐいかだもある物をうきてわが身のよるかたぞなき (一八)  
よの中のうきたのもりになくせみわがごとよそにゆくかたやなき (二二四)

おもひをのぶ

かずならぬみの、を山のひとつ松ひとりさめてもかひやなからん (二四三)  
たえぬるか身はうき舟のつなでなわひく人もなきよをわたりつ、 (二四四)

この一連の歌は、筏・蟬・ひとつ松・浮き舟などに寄せた、いわゆる「寄物陳思」型の述懐歌だが、いずれも自身を寄る辺なき、孤独、不安な身だと深い溜息を洩らしている。

さらに、

心にもあらぬやうなることのみあれば

すめばまたうき世なりけりよそながらおもひしまゝの山ざともがな (八一)

なにとなくあまのすて舟すてながらうき世をわたるわが身なるらん (八二)

山ざとのかきほのまくすいまさらにおもひすてにし世をばうらみじ (八三)

といった、世を捨てても、なおその鬱屈から脱出できない不如意な精神生活からくる嘆声とか、

述懐

ともすればわが身ひとつとかこつ哉人をわくべきうき世ならねど (二六四)

月にむかひておもひつゞけし

風そよぐ竹のは山の秋の月どかにすまぬ世こそしられる (二四六)

ともだちのきて、よのありにくき事などかたるをき、て

ならひぞとおもひなしてやなくさまむわが身ひとつにうき世ならねば(二五九)のような、濁った世、住み難き憂き世を愁い、それは我が身だけでは無いと慰撫する歌の作者の詠歌心理の變に分け入って味わうと、かかる心境にいたらしめた背景があれこれ思い遣られる。それをより具体的な思念として提示しているのが、「徒然草」の次のような諸段であり、それが、二重写しになって歌の背後に浮上してくる。

名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚なれ。(中略) 迷

ひの心もちて、名利の要を求むるに、かくのごとし。万事は皆非なり。言ふにたらず、願ふにたらず。(第三十八段)

げにはこの世をはかなみ、必ず生死を出でんと思はん、なにの興ありてか、朝夕君に仕へ、家を顧みる営みのいさましからん。(第五十八段)

蟻のごとく集まりて、東西に急ぎ、南北に走る。高きあり、賤きあり。老いたるあり、若きあり。行く所あり。帰る家あり。夕に寝ねて、朝に起く。いとむ所何事ぞや。生をむさぶり、利を求めて止む時なし。(第七十四段)

世にしたがへば、心、外の塵に奪はれて惑ひやすく、人に交れば、言葉よその聞きに随ひて、さながら心にあらず。人に戯れ、物に争ひ、一度は恨み、一度は喜ぶ。その事定まれる事なし。分別みだりに起りて、得失止む時なし。惑ひの上に酔へり。酔ひの中に夢をなす。走りて急がはしく、ほれて忘れたる事、人皆かくのごとし。(第七十五段)

とこしなへに違順につかはる、事は、ひとへに苦樂のためなり。樂といふは、このみ愛する事なり。これを求むることやむ時なし。樂欲する所、一つには名なり。名に二種あり。行跡と才芸との誉なり。二つには色欲、三つには味なり。万のねがひ、この三つにはしかず。これ、顛倒の相よりおこりて、若干のわづらひあり。もとめざらんにはしかじ。(第二百四十二段)

ここには名利にのみ汲々として生活する人間の愚かしさ、君主に奉仕したり、家の経営に励むことの空しさ、世俗に交わって主体性を喪失する惨めさが、説論というスタイルで力説されている。

この言説の背後には、必ずや、堀川家の家司として、また六位藏人として後一条天皇に仕え、南北朝の複雑な政治社会の怒濤の中で苦悶してきた、兼好自身の痛切な体験が張り付いているだろう。先の述懐歌の重苦しい音色と、「徒然草」のこれらの諸段の激しい調子の音色を重ねるとき、その交響樂の流れのなかに、複雑な思いに苦悶する兼好の面影が浮き彫りにされてくる。

最後に、懐旧、回顧に関連するものを取りあげて結びたい。

「徒然草」を底流するものが、歲月に対する種々な思いであろうことは、すでに三木紀人氏の卓論があり、私も「徒然草」を時間意識から探ったことがある。

時間の進行に敏感である兼好の資質は、対象が時間の移ろいを意識させる存在であり得たとき美感を刺激する傾向を有する。

その時間意識は、「何事も、古き世のみぞしたはしき。今様は、無下にいやしくこそ成りゆくめれ」(第二十二段)に端的に表明されているように、尚古主義と緊密に結び合ったり、「飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り、事さり、樂しび・悲しびゆきかひて、花やかなりしあたりも人すまぬ野らとなり、変らぬ住家は人あらたまりぬ」(第二十五段)といった無常認識としての時間でもあった。

また、「しづかに思へば、よろづに過ぎにしかたの恋しさのみぞせんかたなき」(第二十九段)と懐古に名状しがたい「恋しさ」を誘発される兼好でもあった。

「家集」のなかの歌にも、懐旧による情緒を詠じたものもかなりある。

むかしおもふまがきの花を露ながらたをりていまもたむけつるかな (一九)

松かぜをたえぬかたみときくからにむかしのことのねこそなかるれ (六六)

前の歌は、兼明親王がかつて住まわれていた御堂に宿った時に親王の詩句を想起し、後の歌は、公世の二位が堂の柱に記していた歌を見て、各々に懐旧の情を詠じたもの。今は亡き人に対する限らない慕情が、静寂で哀韻を湛えた調べで奏でられている。

延政門院一条、時なくなりて、あやしきところにたちいりたるよし申を

こせて

おもひやれか、るおせ屋のすまゐしてむかしをしのおそでのなみだを(二二八)

返し

しのぶらむむかしにかはるよの中はなれぬふせやのすまひのみかは(二二九)

延政門院一条の落魄を歎く歌に対し兼好は、物皆すべてが儚く転変す

る世の中であると、慰みの歌を返している。寂滅の世の中の辛酸をなめた二人の懐旧の歌は切ない。

懐旧

なき人のおもかけさへにたえねとやうたて月日のとをぞかるらん (一九八)

懐旧

き、なれぬ草のいほりの雨のをとむかしをいかでおもひいづらむ(二七二)

二首ともに「懐旧」の歌題詠だが、体験による実感が流露している。三木氏もこの二首を含む六首を列挙し、特にその中の、「家集」巻軸歌、

(春のころ哀傷)

かへりこぬわかれをさてもなげくかな西にとかつはいのる物から (二八六)に触れ、

「かへりこぬわかれ」への「なげき」と信仰とが逆接的に内部に共存していること、その事実を人一倍精巧な自意識で見てもわなくてはならないこと、つらさ。一流の歌とはいえない作なのだろうが、「徒然草」の暗部を照らす作といえよう。

と評して示唆深い。

この種の懐旧の歌は他にもあるし、哀傷歌の項で扱ったものも、そのうちに入れることができる。そして、これらの歌を「徒然草」に随所に記された尚古、懐古の思いを述べた諸段と交響させて読み味うとき、相互の音色は共鳴し、協和し、悲しい調べを奏でてくる。

評価のはなはだ芳しくない「兼好自撰家集」の和歌を、「徒然草」を念頭に置き、自由な連想を働かせながら交響樂的に読み味わってき。この試みは、先述したような方法で「家集」を味読したとき、一種の魅力や興趣を掻き立てられてきたという、素朴な実感から出発しているわけだが、独断的な読みとの誹謗は免れまい。「つれづれぐさ」の内容にひかれて兼好の和歌でも何でも深よみしすぎ、過褒する傾向



がないでもないが、留意すべきであろう」との警告はその通りであり、私もこの読みを通し、兼好の和歌を過大に評価するつもりはないし、この方法による読みを、別段「深よみ」とも考えていない。

論述の過程で、交響しているといったとき、その内実を、逐一分析することはあまりしなかった。そこには、抽象的な内容であったものが、より具体的な裏付けを得るケース、具象的な世界が理念的なものに対応するケース、思弁的内容と実践的行為の微妙なずれからくる複雑な心理が浮き彫りになるケース、相互の情景を重ねることで、背景が奥行のあるものとなるケースなど、種々な場合があった。要するに、交響乐的に読むことで「家集」の歌が豊潤に、面白く味読できたということである。

対象にした和歌は歌題詠は少なく、実情歌が圧倒的に多くなった。中世の私家集は、ほとんどが題詠歌で満たされているのが普通だが、「兼好自撰家集」は、(認定には多少の異見もあるが)、大雑把に計算して、実情歌が全体の五十%近くあり、その点でも珍しい私家集である。この事実も、兼好の「家集」編纂の意図と重点が那邊にあったかを如実に物語っている。

翻って、文芸作品の価値とは、いったいなにを基準に評価するのか、などと考え込んでしまう。歌集を人間の精神の軌跡とみると、兼好の「家集」の歌は、「徒然草」を背景に味読するとき、豊潤な興味を掻き立ててくれる。その意味で、私にとって「兼好自撰家集」は愛玩の歌集である。

注1 江戸期の写本で現在までに管見に入ったものは、四十余本にのぼる。これに「私家集伝本書目」や「圖書絵目録」のもので未見のものを加えると、さらに多数になる。

2 『御撰集 卷六』による。

3 『中世和歌史』。

4 谷山茂氏「中世和歌とその風土、詩歌における中世」

(『谷山茂著作集六 平家の歌人たち』所収)。

5 安良岡康作氏「歌人としての兼好」、(『解釈と鑑賞』、昭32・12)。

6 「兼好における詩と散文」、(『国文学』、昭47・7)。

7 「兼好自撰家集」の引用本文と番号は、拙編『兼好法師全歌集総索引』の

それにより、適宜、濁点、句読点を施す。

8 「徒然草」の引用は、日本古典文学大系による。

9 斎藤彰氏「兼好自撰家集の考察——哀傷歌事と構成意識——」(『学苑』、四

九三号、昭56・1)など。

10 勅撰集の引用は、『新編 国歌大観』による。

11 「私家集大成 中世Ⅲ」により濁点を付した。

12 日本古典文学大系による。

13 「兼好自撰家集」の哀傷歌については、注9の斎藤論文に詳しい考察があ

る。

14 「徒然草編集時の兼好の人間観と徒然草の作品世界」(『国語と国文学』、昭53・

8)。

15 「兼好と和歌・連歌」(『徒然草講座 第一巻』所収)。

16 「徒然草」の虚構性」(『国語と国文学』、昭51・6)。

17 安良岡康作氏「徒然草全注釈上巻」など。

18 「兼好自撰家集の考察——登場人物・撰集素材の吟味を通して——」(『語文』、

第36輯、昭46・11)。

19 林瑞栄氏は正安元年(一一九九)、「兼好発掘」、井上宗雄氏は「正安元

年以後某年」(『中世歌壇史の研究 南北朝期』)、斎藤彰氏は嘉暦二年(一

三三七)「兼好自撰家集の考察——登場人物・撰集素材の吟味を通して

——」(『語文』、第36輯、昭46・11)など。

20 「歳月と兼好」(『秋山虔編『中世文学の研究』』所収)。

21 「乱世知識人の観照——『徒然草』と室町期の紀行——」(『小山弘志編『日

本文学新史 中世』所収)。

22 注20の論文。

井上宗雄氏「兼好家集」〔徒然草講座 第一卷〕所収。

(昭和六十三年四月十四日受理)